

春爛漫 -桜と花見-

春といえば桜、桜といえば花見、花見といえば青い空に映える桜と
思います（ライトアップされた夜桜もありますが）。美しい桜、開放
的で気持ちのいい花見、うらかな気候、また、楽しい潮干狩りの季
節でもあります。

但し、春の風によって西の空から、黄砂あるいはPM2.5がやって
来るかもしれません。また、花粉症の流行る時期でもあります。

お出かけの際は、それらに対する用心も必要かと思えます。

今回は春を代表する事柄についての本を展示いたしました。



[資料リスト](#)

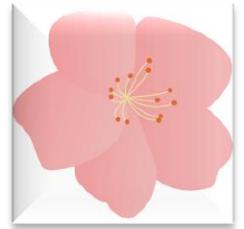
桜

桜属は日本だけに自生しているものではありませんが、日本には桜属が
最も多く自生し、また、花も美しいものを産するので日本を代表する花と
なり、単に花といえば古くは桜を指しています。

日本産の桜にはソメイヨシノ・ヒガンザクラ・ヤマザクラ・オオヤマザ
クラ・エドヒガシなどの自然品種と、これらから生まれた園芸品種が約 150
種あります。

サクラという語が日本の文献に見える最初は『古事記』で、このはなのさくやひめ木花之佐久夜毘売の木花はサ
クラを意味するといえます。『万葉集』にも「桜花にほへ乙女」「桜花さかえ乙女」と佳人に
たとえている歌があります。

平安時代は桜の愛好が一段と進んだ時代で、紫宸殿の前に左近の桜が植えられ、観桜の宴
も催されました。これが中世になると「花は桜木人は武士」と桜の散りぎわを称えたり、「花
は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」（吉田兼好：徒然草）という新しい花の美も探究さ
れるようになりました。



花見

花見は春の随一の行楽として久しい伝統を持ちます。既に『万葉
集』にも桜を賞でる歌が多く見え、平安時代には詩や歌の好材料に
なり、平安貴族の花見のありさまは絵巻物をはじめ絵画にも多く描
かれています。また、桜花を訪ね観桜しながら鷹狩を行う桜狩の風
も盛んでした。



この頃から吉野山は桜の名所となり、西行の歌にも詠まれています。鎌倉時代からは吉野

から移植された嵐山が桜の名所になりました。寛正 6 年（1465）足利義政の「花頂若王子大原野」の花見は華美を極めといわれ、豊臣秀吉の文禄 3 年（1594）吉野の花見と、慶長 3 年（1598）醍醐の花見も豪華絢爛な観桜宴として知られています。

安土桃山時代から江戸時代にかけて花見はいよいよ盛んになり、庶民の間にも広まってきました。江戸や京都・大坂などの都市部では、すでに江戸時代前期において上野や醍醐など多くの花見の名所が知られていました。また、都市部では花見といえば桜を指すことが多いですが、地方によってはウツギ・ツツジ・シャクナゲなどむしろ山の花とする所が少なくありません。

花見は本来、春の耕作に先駆け、定まった日に集団で山籠もりして共同飲食をするという、信仰的な要素の濃い行事であったといわれます。花見の日も土地ごとに一定しており、3 月 3 日（三月節供）もしくは 4 月 8 日（卯月八日）、あるいはその前後に定めて行う地方が多いようです。例えば、千葉県の旧海上郡では旧 4 月中の一日、花見正月といって祝う日があります。また、同県の香取郡域では 3 月 3 日に子どもたちが、粘土で花見堂を作って村中を担ぎまわることも行われていました。

潮干狩り

潮干狩りは春の干潮の時、潮の引いた浜や磯に下り立ち貝類などを採って遊ぶことです。大潮時の潮差の大きい太平洋岸や瀬戸内、九州北・西岸で行われ、日本海沿岸ではほとんど見られません。

室町時代から行楽としての潮干狩りが始まりましたが、潮干狩りが一般的になるのは江戸時代からといえます。

都会周辺では日は決まっていますが、かつて農漁村部では旧暦 3 月 3 日に行うところが多く、その場合、貝類を採ると共に村人が御馳走を詰めた重箱持参で海辺に出て、共同飲食をすることに重きが置かれていました。



PM2.5

PM2.5 は特定の物質を指すのではなく、直径が 2.5 マイクロメートル（ μm ）以下の粒子状物質のことをいいます。日本語では「微小粒子状物質」（Particulate Matter）と訳されます。

1 マイクロメートル（ μm ）は、1 ミリの 1000 分の 1 の大きさで肉眼では見えません。また、濃度はマイクログラム毎立方メートル（ $\mu\text{g}/\text{m}^3$ ）と、1 立方メートルあたりの値で表します。

PM2.5 の発生源は以下の要因が考えられます。もちろんこれらの発生源は中国に限るものではなく、基本的に世界中どこでも同じと考えられます。



(1) 人工的に発生したもの

人工的に発生するものは①石油・石炭を燃やす際に出る煙由来のもの、②自動車・飛行機・船などの排気ガス（排ガス中のSO₂（二酸化硫黄）やNO₂（二酸化窒素）が光化学反応でできる二次成生粒子もあります）、③工場からの粉じん、④野焼やたばこの煙です。

特に膨大な人口の中国の場合、現在も家庭用暖房の燃料は主に石炭が使われ、工場のエネルギー源も圧倒的に石炭であり、世界の石炭の50%を消費しているといわれます。また、急速な経済発展のため、環境対策や法対策が十分ではありません。そのため、冬季に寒気団が停滞し、風が吹かない気象条件のもとではPM2.5が極端に高濃度になりやすいのです。

(2) 自然発生したもの

自然発生するものとしては、土埃・火山の噴煙・森林火災・黄砂が該当します。

(3) 外国から飛来するもの

外国から飛来するものは、中国の場合はモンゴルから飛来する砂が該当します。

中国で発生したPM2.5は、大気の流れに乗って飛来するため防ぎようがありません。PM2.5の問題は中国のみの問題ではなく、隣接する日本と朝鮮半島を含んだ東アジア全体の問題といえます。

なお、PM2.5が人体に及ぼす悪影響には、喘息や気管支炎といった呼吸器系の疾患が多く、肺がん罹患率の上昇が懸念されるほか、心臓や血管などの循環器系疾患への影響も指摘されています。

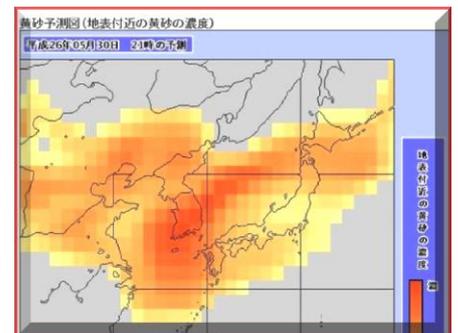
黄 砂

黄砂とは、東アジアの砂漠域（ゴビ砂漠・タクラマカン砂漠）や黄土地帯の表層から、強風で巻き上げられた多量の砂塵が毎年2月から5月頃に偏西風に乗って運ばれ、中国東部・朝鮮半島・日本などにゆっくり降下する現象で、空を黄褐色にし、視程障害などの被害をもたらします。

黄砂の飛来日数は、平成13年から同20年（2001－2008）では年平均で、福岡市14日、大阪市9日、東京都1日と10年前に比べて2倍弱に増えています。

黄砂の大きさは1～10マイクロメートル（ μm ）のため、PM2.5とも10マイクロメートル（ μm ）以下の大きさの浮遊粒子状物質である、SPM（Suspended Particulate Matter）ともいえます。

黄砂は中国国内の自動車や東部工業地帯で排出されるPM2.5と反応して、より毒性の強い粒子となって飛来していることが金沢大学薬学部の早川教授らの研究で判明しています。飛来途中の大気中で、黄砂の鉱物成分が触媒となりニトロアレンという物質ができるといいます。ニトロアレンは発がん性が強く、アレルギー作用なども強いとされています。



花粉症

「花粉症」は、植物の花粉によって起こるアレルギー疾患の一つで、毎年花粉が飛散する時期になると症状が現れます。原因となる植物はスギ花粉によるものが最も多く、花粉症を発症している人の約 70%を占めています。



スギ花粉症の有病率は、平成 10 年（1998）で 16.2%であったものが、平成 20 年（2008）には 26.5%に増えた統計（「鼻アレルギー診療ガイドライン」平成 25 年）があります。



花粉症の有病率が高くなっている背景には、「スギ花粉飛散量の増加」、「自然治癒が少なく、累積患者数が増加」、「食生活や衛生環境の変化による体質の変化」などがあると考えられています。

年代別のスギ花粉症の有病率は、40～49 歳が約 40%、30～39 歳が約 36%、10～19 歳・20～29 歳・50 歳～59 歳が約 30%といわれます（「鼻アレルギー診療ガイドライン」平成 25 年）。

花粉症の主な治療法には、帽子やマスクを着用するなどの「花粉からの回避」、のほか「薬物療法」、「手術」、「アレルギー免疫療法」があります。

【参考文献】

- 『日本民俗事典』 大塚民俗学会 弘文館 昭和 47 年
- 『日本風俗史辞典』 日本風俗史学会 弘文館 昭和 54 年
- 『日本史大辞典』 no.11 吉川弘文館 平成 2 年
- 『世界大百科事典』 12 平凡社 平成 10 年
- 『PM2.5「越境汚染」中国の汚染物質が日本を襲う』 沈才彬 KADOKAWA 平成 26 年
- 『PM2.5 危惧される健康への影響』 嵯峨井勝 木の泉社 平成 26 年
- 『きょうの健康』 「スギ花粉症治療最前線」岡本美孝 2014 2 311 号 NHK出版

